【論　　文】

フランスプロサッカーリーグ（リーグ・アン）に関する考察

Consideration about the French professional football League 1

松　原　　悟・高　橋　信　二

MATSUBARA Satoru・TAKAHASHI Shinji

Abstract　Many countries around world have professional football league now.　Football leagues in England, Spain, Italy and German football league are known as top class of the world.　Despite the French professional football league is categorized to a second class, the league supplies many players to the top class leagues.

We have studied the organization of the Japanese professional football league.　Therefore we investigated the French professional football league in this study.

We were able to get the following findings from the result.

（1）There are many teams with less than 25 players in the world top leagues.

（2）Japan has problems for 19-20-year-old players training.

（3）There are many young players of French nationality and the African nationality in the French professional football league.

The French professional football league supplies excellent young players to the world top league.

1.　はじめに

サッカーのリーグ戦は，現在世界各国で開催されている。東アジアだけでも，日本，韓国，中国，香港，台湾，モンゴル，マカオ，北朝鮮，東南アジアも同様に，タイ，マレーシア，シンガポール，ベトナム，インドネシア，フィリピン，カンボジア，ブルネイ，東ティモール，ラオス，ミャンマーと全ての国々で行われている。このように世界各国で開催されているサッカーリーグの頂点に位置するのが，プレミアリーグ（イングランド），リーガ･エスパニョーラ（スペイン），ブンデスリーガ（ドイツ），セリエ A（イタリア），リーグ・アン（フランス）の 5 つである。これらのリーグには世界各国から優秀な選手が集まり世界最高峰のサッカーゲームを展開している。特に 1992 年にイングランドプロサッカーリーグの改編に伴い

新設されたプレミアリーグは，それまで注目度の低かったイングランドリーグを世界最高峰のリーグに築き上げた。スポーツビジネスに注目した投資家たちが，すでに完成されたスペイン，イタリア，ドイツのプロサッカーよりも改善の余地が高いイングランドに着目して投資した結果である。競技場を新しくし，優秀な選手を高額なサラリーで集め質の高いサッカーを提供することで全世界のサッカーファンが注目するリーグとなった。2012年には，ドイツブンデスリーガでの活躍が認められた香川真司選手がマンチェスターユナイテッドに加入し日本での注目度は更に高まるであろう。しかしながら，フランスのリーグ・アンがこれらのリーグと同列に位置しているかというと疑問である。チャンピオンズリーグなどの結果からも，プレミアリーグ，リーガ・エスパニョーラ，ブンデスリーガ，セリエAと比較すると同格とはいえない。

フランスにおけるプロサッカーは，1932年に創設され，トップリーグは，ディヴィジョン・アン（Division 1）と呼ばれていたが，2002年シーズンより，リーグ・アン（Ligue 1）と改称され現在に至っている。20チームがホーム＆アウェイ方式で戦い，上位チームには欧州サッカー連盟チャンピオンズリーグ，同ヨーロッパリーグへの出場資格が与えられ，下位3チームは下部リーグのリーグ･ドゥ（Ligue 2）と毎年自動的に入れ替わる仕組みである。世界のトップリーグというよりは登竜門としてのリーグと格付けされている。

著者らは，これまでにJ1リーグの組織等に関する調査を行い，40チームにまで増加したJリーグチームが今後どうあるべきかを検討してきた。一方では日本におけるサッカー競技の競技力向上のためには世界のトップリーグで活躍する選手を数多く輩出することが肝要である。韓国の朴智星選手は，韓国の大学を卒業後京都サンガでプレーし，PSVアイントホーフェン（オランダ）を経てプレミアリーグマンチェスターユナイテッドに移籍しレギュラーとして活躍，2012-13年シーズンは，プレミアリーグクウィーンズパークレンジャーズに移籍して主将を務めている。技術だけでなく人格も含めて現時点での東アジア最高の選手と評価されている。朴智星と入れ替わりに入団したのが香川真司選手である。

Jリーグが2013年から新たに導入する「クラブライセンス制度」を巡っては，すでにJリーグのチーム内からも「クラブライセンス」を取得できないチームの存在が指摘されている。Jリーグチーム加盟のハードルを一度はクリアしたにも関わらず新たなハードルによって除名されることは避けなければならない。日本社会におけるスポーツの理解やプロスポーツマネジメントが経済優先であるという未熟さを示すものである。

そこで，本研究では，世界トップリーグ登録選手状況，世界トップリーグでのフランス国籍，日本国籍選手の状況，トップリーグへの登竜門として存在するフランスプロサッカーリーグ・アン（Ligue 1）の選手状況を分析することから，日本のプロサッカーチームの問題点

について研究することを目的として行った。

2. 方法

2012 年 8 月時点での，リーグ・アン（20 チーム 541 選手）プレミアリーグ（20 チーム 634 選手，フランス国籍 34 選手，日本国籍 4 選手）セリエ A（20 チーム 536 選手，フランス国籍 13 選手，日本国籍 2 選手）リーガエスパニョーラ（20 チーム，485 選手，フランス国籍 14 選手，日本国籍 0）ブンデスリーガ（18 チーム，508 選手，フランス国籍 3 選手，日本国籍 10 選手）を対象に，各リーグのチーム別所属人数，リーグ・アン及び 4 大リーグのフランス国籍・日本国籍選手のポジション別年齢，体格，4 大リーグへの初めて移籍した年齢，リーグ･アンにおける移籍，2011 年リーグ･アン，ドゥの出場時間について集計を行った。対象選手は表 1～表 3 に示すとおりである。

尚，年齢に関しては，2012 年での年齢とし，リーグ・アンにおいて，身長不明選手 8 名，体重不明選手 9 名はそれぞれの集計から除外した。

表 1.　リーグ・アン　選手

内訳	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）
N	541	533	532
M ± SD	25.0 ± 3.73	180.8 ± 4.86	74.8 ± 5.41
Max	38	197.0	96.0
Min	17	162.0	57.0

表 2.　4 大リーグ　選手（フランス国籍）

内訳	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）
N	64	64	64
M ± SD	26.5 ± 3.42	183.0 ± 4.83	77.2 ± 5.25
Max	35	193.0	93.0
Min	19	170.0	65.0

表 3.　4 大リーグ　選手（日本国籍）

内訳	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）
N	16	16	16
M ± SD	23.8 ± 1.91	177.6 ± 4.25	70.1 ± 3.64
Max	28	189.0	81.0
Min	20	170.0	62.0

3.　結果

（1）　リーグ・アン及び 4 大リーグのチーム別所属選手について

2012 年 8 月時点での，リーグ・アン及び，プレミアリーグ，セリエ A，リーガ・エスパニョーラ，ブンデスリーガの各チームの登録選手は，図 1～図 5（図中のチーム番号は 2011～12 年の順位）に示すとおりである。

リーグ・アンにおいては，2011～12 年 1 位のモンペリエが 33 名で最も多くトゥールーズが 22 名で最も少ない結果であった。プレミアリーグではトットナム 45 名ウェストハム 25 名，セリエ A ではインテル 32 名フィオレティーナ 22 名，リーガエスパニョーラではマラガ 30 名レバンテ 21 名，ブンデスリーガでは Vfs ヴォルスブルグ 36 名ボルシア，レバークーゼン 24 名という結果であった。

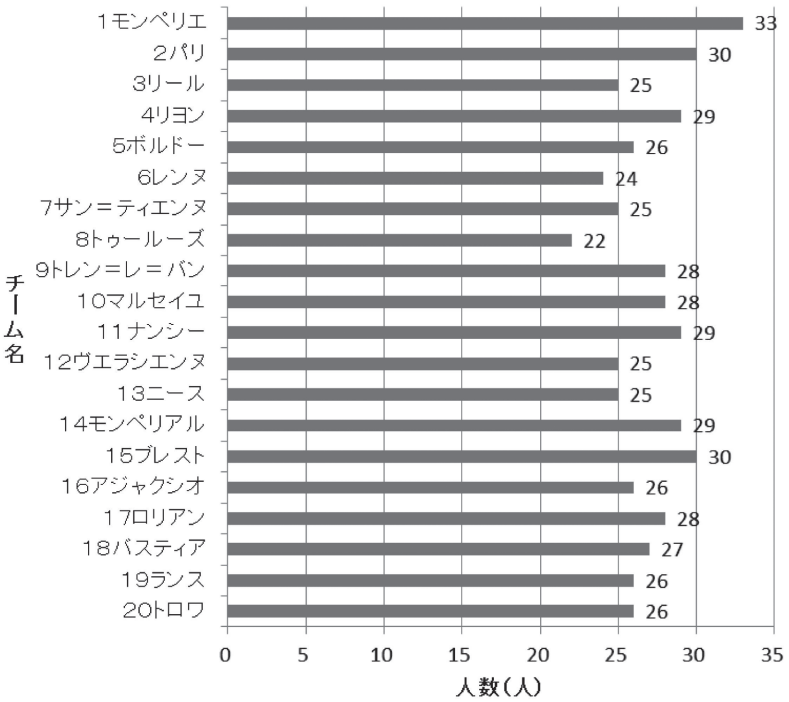

図 1.　チーム別所属人数（リーグ・アン　2012 年 8 月）

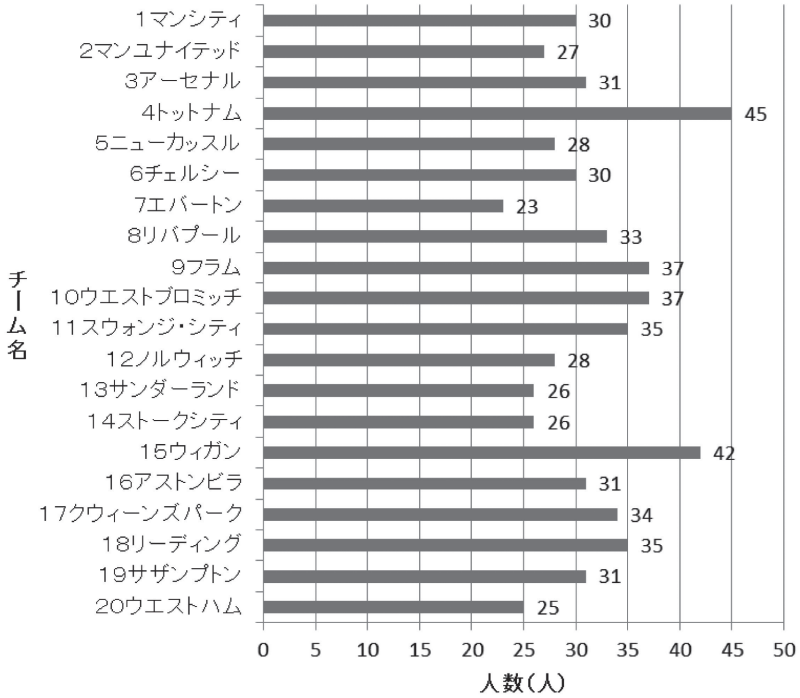

図 2.　チーム別所属人数（プレミアリーグ　2012 年 8 月）

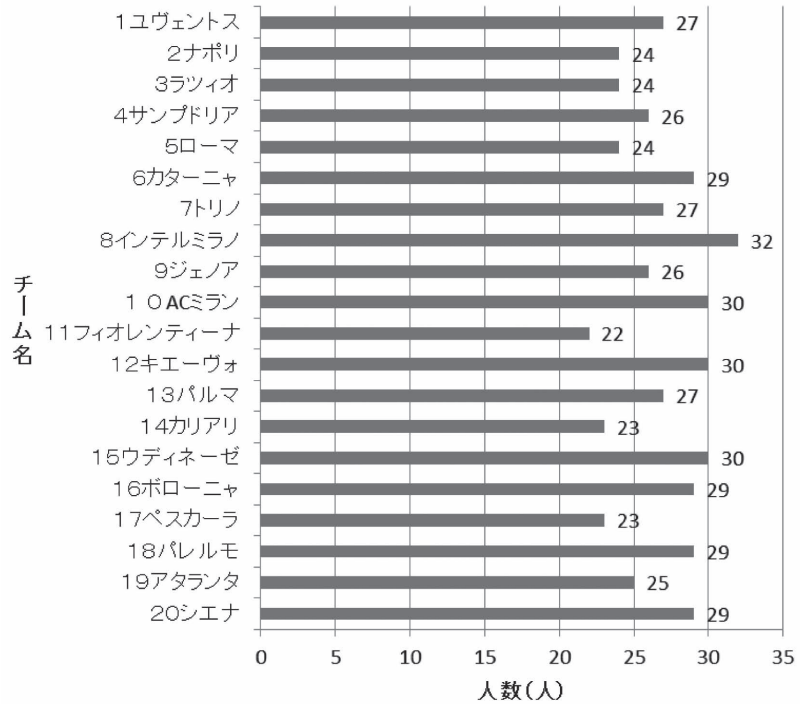

図 3.　チーム別所属人数（セリエ A アリーグ　2012 年 8 月）

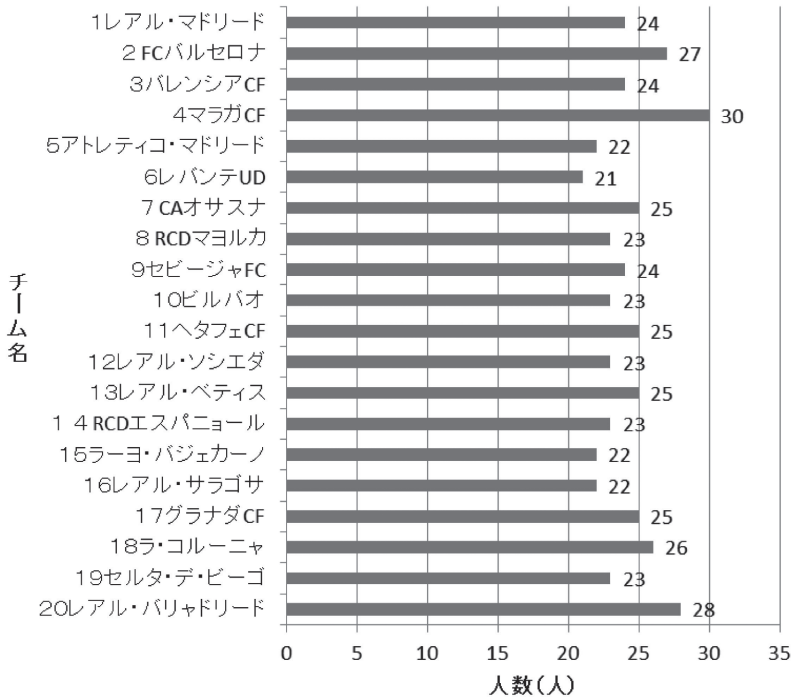

図 4.　チーム別所属人数（リーガ・エスパニョーラ　2012 年 8 月）

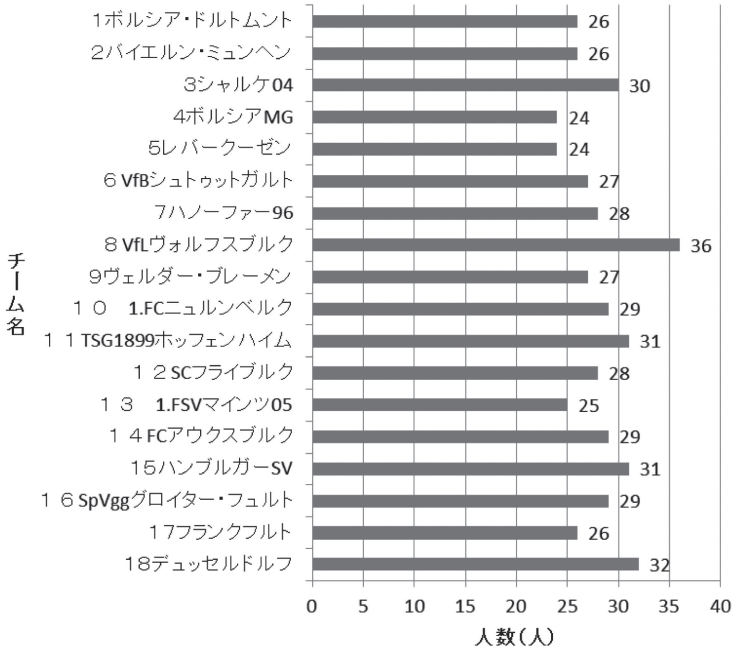

図 5.　チーム別所属人数（ブンデスリーガ　2012 年 8 月）

(2)　リーグ・アン及び4大リーグフランス国籍，日本国籍選手の年齢構成

リーグ・アン及び4大リーグに所属しているフランス国籍，日本国籍選手の年齢構成は図6，図7に示すとおりである。

リーグ・アンにおいては，20歳，22歳がそれぞれ48名と一番多く，以下24歳，27歳であった。4大リーグに所属するフランス国籍選手は64名であり53名がリーグ・アンを経験しており25歳7名が最も多い。日本国籍選手は15名中14名がJリーグを経験しており24歳4名が最も多い年齢であった。

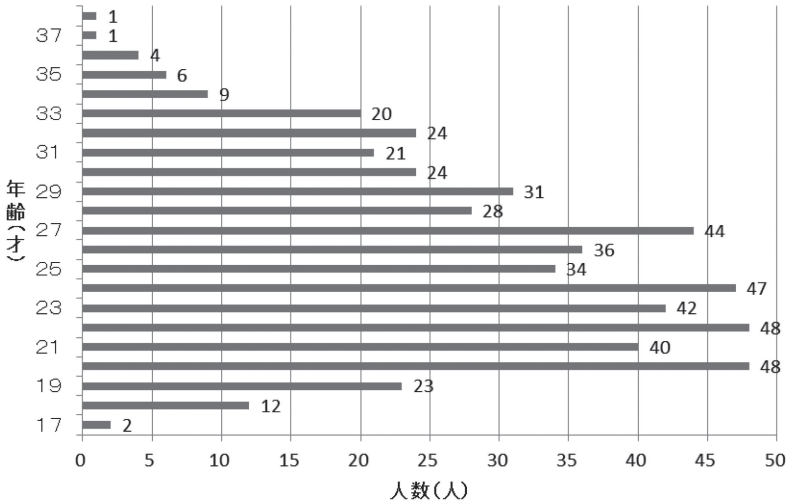

図6.　年齢構成（リーグ・アン　2012年8月）

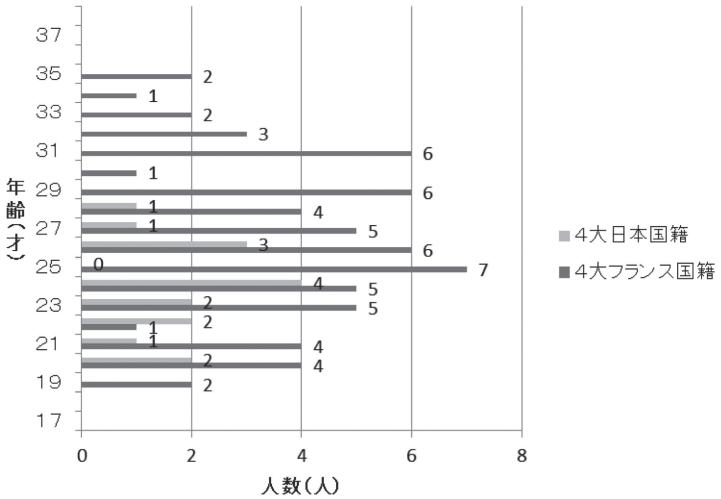

図7.　年齢構成（4大リーグ・フランス国籍・日本国籍　2012年8月）

(3)　リーグ・アン及び4大リーグフランス国籍，日本国籍選手のポジション別年齢，体格について

リーグ・アン及び4大リーグフランス国籍，日本国籍選手のポジション別年齢，体格については，表4〜表7に示すとおりである。

表4.　ポジション別人数（2012年8月）

内訳	リーグアン	4大リーグ	
		フランス国籍	日本国籍
ポジション	人数（人）	人数（人）	人数（人）
GK	67	1	0
DF	167	25	5
MF	182	25	7
FW	125	13	4
合計	541	64	16

表5.　ポジション別年齢及び体格（リーグ・アン　2012年8月）

内訳	GK			DF			MF			FW		
	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）
N	67	65	65	167	166	165	182	180	180	125	122	122
M±SD	25.9±4.40	186.6±3.00	81.0±4.29	26.0±3.98	181.8±4.24	76.1±5.60	25.1±3.48	178.4±4.89	71.6±4.65	24.5±3.24	179.8±4.30	74.7±4.55
Max	38	197.0	94.0	37	193.0	96.0	36	194.0	91.0	33	195.0	95.0
Min	17	177.0	70.0	18	165.0	60.0	17	162.0	57.0	18	168.0	60.0

表6.　ポジション別年齢及び体格（4大リーグフランス国籍　2012年8月）

内訳	GK			DF			MF			FW		
	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）
N	1	1	1	25	25	25	23	23	23	15	15	15
M±SD	32	190.0	93.0	27.7±3.59	185.1±4.40	79.8±4.72	25.9±2.31	179.3±4.44	73.4±3.31	24.9±4.20	184.7±3.69	77.5±5.56
Max	-	-	-	35	193.0	88.0	32	190.0	82.9	34	192.0	88.0
Min	-	-	-	19	174.0	70.0	21	170.0	67.0	19	173.0	65.0

表7.　ポジション別年齢及び体格（4大リーグ日本国籍　2012年8月）

内訳	GK			DF			MF			FW		
	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）
N	-	-	-	5	5	5	7	7	7	4	4	4
M±SD	-	-	-	24.2±2.24	178.8±5.76	71.0±5.30	23.7±1.96	175.6±3.35	68.1±3.27	24.3±2.25	179.8±2.88	72.5±2.00
Max	-	-	-	28	189.0	81.0	28	180.0	73.0	27	183.0	76.0
Min	-	-	-	21	170.0	62.0	20	171.0	63.0	20	174.0	70.0

(4)　リーグ・アン及び4大リーグの国籍について

リーグ・アン及び4大リーグの国籍については，表8，表9に示すとおりである。フランス国籍の次にアフリカ国籍者が多い割合を示している。

表8.　リーグ・アンにおける国籍（2012年8月）

内訳	人数（人）	割合（%）
フランス国籍（単独）	290	53.6%
フランス国籍＋アフリカ国籍	120	22.2%
アフリカ国籍（単独）	57	10.5%
ヨーロッパ国籍（単独）	31	5.7%
中南米国籍（単独）	18	3.3%
ヨーロッパ国籍＋中南米国籍	13	2.4%
フランス国籍＋中南米	5	0.9%
フランス国籍＋ヨーロッパ国籍	4	0.7%
ヨーロッパ国籍＋アフリカ国籍	2	0.4%
ヨーロッパ国籍＋ヨーロッパ国籍	1	0.2%
合計	541	100.0%

表9.　4大リーグ　フランス国籍選手（2012年8月）

内訳	人数（人）	割合（%）
フランス国籍のみ	49	76.6%
フランス国籍＋アフリカ国籍	14	21.9%
フランス国籍＋ヨーロッパ国籍	1	1.6%
合計	64	100.0%

(5)　フランス国籍，日本国籍選手の4大リーグへの初移籍年齢について

フランス国籍，日本国籍選手の4大リーグへの初移籍年齢については，図8に示すとおりである。フランス国籍者が4大リーグに初めて移籍した年齢は，20歳24歳各8名，日本国籍者は19歳3名が多い年齢であった。

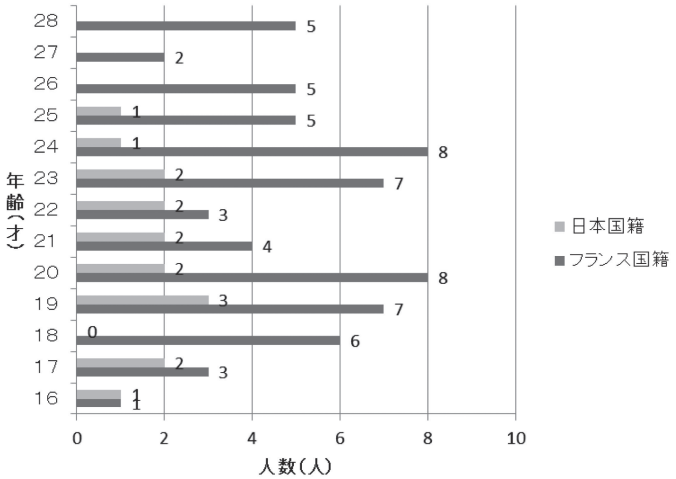

図8.　4大リーグへの初移籍年齢（フランス国籍選手，日本国籍選手　2012年8月）

(6)　リーグ・アンにおける移籍状況と2011～12年リーグ・アン，ドゥでの出場時間について

リーグ･アンにおける移籍状況と2011～12年リーグ･アン，ドゥへの出場時間については，表10，表11に示すとおりである。

表10.　リーグ・アンにおける移籍状況（2012年8月）

内訳	人数（人）	割合（%）
残留選手	442	81.7%
リーグ・アンから移籍	26	4.8%
リーグ・ドゥから移籍	26	4.8%
リーグ・ドゥからレンタルバック	20	3.7%
その他リーグからの移籍	14	2.6%
新人規契約	5	0.9%
リーグ・アンからレンタルバック	4	0.7%
4大リーグからの移籍	4	0.7%
合計	541	100.0%

表11.　リーグ・アン，ドゥでの2011年の出場割合

内訳	残留選手		リーグ・アンから移籍		リーグ・ドゥから移籍	
	人数（人）	割合（%）	人数（人）	割合（%）	人数（人）	割合（%）
出場無	64	14.5%	7	23.3%	7	15.2%
25%以下	119	26.9%	7	23.3%	12	26.1%
50%以下	87	19.7%	6	20.0%	10	21.7%
75%以下	89	20.1%	6	20.0%	7	15.2%
100%以下	83	18.8%	4	13.3%	10	21.7%
合計	442	100.0%	30	100.0%	46	100.0%

4.　考察

(1)　リーグ・アン及び4大リーグのチーム別所属選手について

リーグ・アンを含めた5つのリーグ98チームにおいて，チーム別の所属選手数は21名から45名という結果であった。特に25名以下のチームは，リーグ･アン6チーム，プレミアリーグ2チーム，セリエA7チーム，リーガ･エスパニョーラ15チーム，ブンデスリーガ3チームの合計33チームであった。著者らの2011年J1の調査では，最小26名最大35名であり，J2昇格直後の柏レイソルが26人で優勝した。強力なスポンサーなど十分な資金力のあるチームは多くの選手を抱えることが可能であるが，経済力の乏しいチームは少ない人数で効率よく戦わなければならない。シーズン中の補強，チーム下部組織の充実なども考慮すべきであ

るが，高いレベルのリーグに所属するチームでも 25 名以下で編成していることに注目したい。

所属選手が少ないことでのメリットは，選手の人件費，練習，合宿，遠征，移動などの経費削減，所属選手の出場機会が高くなり選手のモチベーションが高くなる，指導者と選手や選手間の関係が厚くなりコミュニケーションが深まる，トレーニングが効率よく行われるなどがあげられよう。デメリットとしては，選手のコンディション不良が多い場合の対応，コミュニケーションが深いために切磋琢磨する競争力の欠如, トレーニングのマンネリ化, ハードなトレーニングを行いにくいなどが考えられる。

世界のトップリーグが少ない人数でもチーム編成が可能なのは，育成環境の問題もある。外国においてはプロ選手になるためにはプロチームの下部組織からのアプローチのみである。リーグ・アンで最も少ない 22 名で 2012 年シーズンを迎えたトゥールーズ FC を例にとると，下部組織としてアマチュア全国リーグ 2 に参加する成人のチーム，19 歳以下，17 歳以下，15 歳以下～6 歳以下，女子とトッププロチームの下部組織として数多くのチームを抱えている。フランスでの成人のリーグ戦は，リーグ・アンを頂点にリーグ・ドゥ，3 部 4 部 5 部までが全国リーグ，その下に州，県リーグという構成でアマチュアも含めたピラミッド型である。従って，トップチームの人数が少なくても十分な選手資源を確保できており，かつ予備軍的な選手にも十分な試合が提供されている。

ブラジルなどの場合も，ステイトリーグが展開されている期間に前座試合として 19 歳以下のゲームが開催されプロになるための最終テストが行われる。最終的なテストの主となるものはプロとしてのメンタル，フィジカル面での強さ，スピードである。トップチームと同様に移動して週 2 回の 90 分ゲームをこなし僅かな合格者のみがプロ契約を結ぶこととなる。

日本においては，J クラブ，高校，大学とプロ選手になるために 3 つのアプローチがあり，下部組織の J ユースチームは高校 3 年生をもって終了となり，次のカテゴリーはトップチームしか存在しない。プロとしての最終段階は 19～20 歳である。この年齢は筋力的に伸びる時期であり技術・個人戦術＋強さを習得できる時期にも関わらず日本の選手にはその場が提供されていないのが実情である。日本の J チームはリーグ戦を戦いながら選手も育成しなければならない。環境が整っているチームは良いが，存続や結果にこだわらなければならないチームでは育成に時間をかけることができず，J ユース・高校を卒業してプロになっても廃業せざるを得ない選手も数多く存在してしまっている。プロチームの監督は成績が目安であり毎年の結果が求められることを考えれば育成するという視点も欠けて当然であろう。ここに外国との大きな差異が生じている。チームの組織力に大きな差異がある。

日本の学校教育を考えれば高校 3 年生が節目であるが，プロサッカー選手を育成する視点

から選手として戦えるような年齢は20歳が目安である。19～20歳をどう強化するかは大きな問題である。Jリーグが19～20歳のアマチュアチームを持てば選手の社会的地位の問題が生じ，その後プロになれない場合の進路をどうするのかということは日本では大きな問題を引き起こすであろう。外国においても20歳までプロチームに所属していたものの，その後は社会に出され，それまで満足な教育も受けていないために生活に苦労しているケースは非常に多い。

現状では外国のように少ない人数でのプロチームの存在は日本においては厳しい状況であるが，Jリーグの中でも勝利は目指すが若手選手の育成に比重をかけるチームや19～20歳の選手を多く抱えるがその後の進路を提供できる環境づくり，例えば大学進学とか資格取得とかの方策を考えるなどの工夫が必要であろう。

(2)　リーグ・アン及び4大リーグフランス国籍，日本国籍選手の年齢構成

リーグ・アンにおいては，20～24歳までの選手が非常に多く541名中225名と約半数近くを占め，10歳代選手を加えると541名中262名に達する。チームの成熟度という点では，27～8歳前後の成熟した選手と22～3歳前後の伸び盛りの選手がバランスよく構成されたほうが良いとされている。リーグ・アンでは4大リーグへの登竜門として非常に若い選手が所属しているという特徴がみられる。

4大リーグのフランス国籍者は64名であり53名がリーグ・アン経験者である。25歳の7人が最も多く，リーグ・アンに比較すると成熟した年齢に達した選手が多い。リーグ・アンでの評価が4大リーグへのチャレンジとなっている。

4大リーグの日本国籍者は15名であり14名がJチーム経験者である。24歳の4人が最も多く，20歳から23歳の選手は7名と伸び盛りを迎えている選手が多く，今後も若い年代から移籍する選手が増える可能性がある。そのためにも各年代での世界大会での活躍が必要である。Jチーム個々の育成には限界があるので，引き続きトレセン制度や各カテゴリーでの代表チーム選手の育成が必要である。歴史的地理的環境的にJリーグが世界のメジャーになる可能性が低く世界で通用する選手を育てるにはやはり4大リーグへの移籍・出場が鍵となる。現在はブンデスリーガの所属に偏っているが今後も数多くの選手が移籍することを期待したい。フランス，ベルギー，オランダのリーグと同レベル程度の登竜門的リーグにレベルを上げる必要があろう。日本人の特徴からフィジカルコンタクト，瞬発力には劣るが知的能力，持久性，器用さなどを生かした内容のある試合を心掛けるべきであろう。現在移籍している選手にはセンターバック，ポストプレーといった高いフィジカルを求められるポジションよりもサイドなどでアクセントをつけるポジションが多いが，特にポストプレーなどフィ

ジカルの強い選手が移籍して活躍するようになれば日本のレベルも一ランク上がることができるであろう。

(3)　リーグ・アン及び4大リーグフランス国籍，日本国籍選手のポジション別年齢，体格について

表12は著者らの2011年J1の調査結果を引用したものである。

現在のシステムが4－2－3－1を多く採用しているために，リーグ・アン，4大リーグとJリーグでは若干ポジションの表記が異なるようである。トップ下の3を日本ではMF，リーグ・アン，4大リーグではFWととらえているチームもあり，ポジション別での比較が難しいが，日本人選手も体格の面では向上しているといえよう。今後は，体格面よりも，日本人が不足しているといわれる瞬発力などを中心とした体力の質に注目すべきであろう。

表12.　年齢・身長・体重（2011年J1ポジション別）

内訳	GK			DF			MF			FW		
	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）	年齢（歳）	身長（cm）	体重（kg）
N	75	75	75	155	155	155	202	202	202	106	106	106
M±SD	24.7±5.89	185.5±3.45	78.1±5.03	26.3±5.00	179.4±5.66	73.4±5.74	25.5±4.95	174.6±5.06	68.4±5.23	24.8±4.73	177.9±6.55	71.9±6.06
Max	37	198.0	93.0	36.0	193.0	93.0	37.0	187.0	89.0	34.0	194.0	86.0
Min	16	179.0	65.0	17.0	162.0	60.0	17.0	162.0	58.0	18.0	165.0	57.0

松原悟（2011）「J1リーグチーム組織に関する考察」東北学院大学教養学部論集161号より引用

(4)　リーグ・アン及び4大リーグの国籍について

リーグ・アンにおいては，フランスの単独国籍者が54%フランス国籍とアフリカ国籍の2重国籍取得者は22%を占めている。4大リーグ所属フランス国籍者も単独は77%アフリカ国籍との2重国籍者は22%である。

フランスは，1984年のワールドカップでの優勝が唯一といってよい結果であり，それ以前はあまり注目される国ではなかったが，1970年代にプロサッカー選手育成システムをいち早く導入し，フランスサッカー協会主導のトップダウンでの改革を行い，協会は1972年に国立サッカー学院前身である育成センターを創設後，国内に11の前育成センター（12から15歳）を持ち，コーチライセンス，指導プログラム，公認育成センターなどの育成環境が充実しており，プロ32チームが公認の育成センターを所有している。また，2005年には移籍金による貿易収支が1,200万ユーロの黒字を記録し，各クラブにとっては貴重な財源ともなっている。アフリカの若い選手にとっては自国での育成は厳しい状況であることからプロという夢を実現するためフランスに渡り育成教育を受けることを希望する選手が多い。また，すでに育成がビジネス化しているためにスカウトはフランス国内のみならずアフリカを

中心として若い選手を獲得してフランスに連れてくるケースも多い。

育成システムが充実しているとはいえプロになる選手は限られ100人に1人いれば良いほうである。ビジネスの視点からは利益を上げるためには多くの若い選手が必要となる。10代前半の才能を持った選手が成長と共に全てプロに適した選手にはなれない。その結果10代後半には切り捨てられる選手も多い。ビジネスと割り切る考えは理解できても日本では理解しがたい問題である。

ヨーロッパにおいては，植民地などの歴史的背景から多重国籍を認めている国が多く，ロシア，イギリス，アイルランド，フランス，イタリア，スイス，ポルトガル，フィンランドなどがあげられる。サッカーのリーグ戦において外国籍選手数の問題も絡み，2重国籍を取得している選手も少なくない。

フランスにおいては，歴史的，距離的にも関係が深く育成環境の整っていないアフリカとの繋がりが強い。移住によってフランス国籍を取得している国民も多く，身体能力の高いアフリカ国籍，移住者などがプロサッカー選手の対象として注目されている。彼らの多くは生活基盤が弱くプロ選手としての成功を望んでチャレンジするが成功するのは一部の選手のみである。

歴史的，政治的問題であるので日本での多重国籍を考察することは難しいが，外国でプロ選手となることはこのような高いハードルと多くの競争によって成り立っていることは理解すべきであろう。日本でも同様に数多くの少年少女がプロスポーツ選手を夢見て活動しているが実現できるのはほんの少しである。

1984年のロサンゼルスオリンピックがビジネスとしてのスポーツの大きな転換点であった。これはそれまでの政治的な介入やナショナリズムのスポーツからの自立として歓迎されるものであったが，ビジネスとしてのスポーツ，文化としてのスポーツがそれぞれ変容してきている。日本においては，青少年の健全育成，健康維持，文化としてのスポーツという理解は広がりつつあるが，経済的側面から企業スポーツの打ち切りや，プロスポーツ会社の倒産など，文化と容認しつつ，経済・ビジネスの基準が優先されている。欧州でもビジネス化したプロサッカーリーグや育成に問題が提起されているがスポーツそのものを問題視することにはならない。Jリーグの掲げるスポーツ文化の醸成は大きな課題であろう。

(5)　フランス国籍，日本国籍選手の4大リーグへの初移籍年齢について

フランス国籍においては，20歳8名，24歳8名が最も多く，日本国籍では19歳3人が最も多い結果であった。4大リーグのチームから見れば広範なネットワークから若くて有望な選手を早くからリストアップしていることが考えられる。移籍金などの問題も関係してくる。

FIFA によって定められた移籍代理人は，若い世代の世界大会や各国のリーグ状況から豊富なデータを集め，4 大リーグで今後活躍しそうな選手を積極的にチームに売り込んでビジネスとしている。チーム側も若い選手は移籍金も安く将来一流選手になれば高額な移籍金収入が見込まれるという移籍市場の論理が働いている。選手の育成や移籍市場がビジネスとして成り立っているのである。

フランス国籍選手で 24 歳以降も多い傾向にあるのは，各チームが即戦力として補強する一環であることが考えられる。リーグ･アンが貴重な戦力補強のリーグであることが伺える。

日本協会，J リーグも含めた若年層のプログラムが充実し各年代での世界大会での実績を上げ，その結果若い年代からの移籍は増えることが期待できる。現在はブンデスリーガに隔たっているが香川真司選手のようにさらにステップアップできる可能性もある。育成するチームの理解も必要であるが，ビジネスという面からも十分採算がとれるであろう。25 歳以降の選手の移籍者が出現するようになれば，J リーグがトップレベルに近いリーグと認識されよう。

(6) リーグ・アンにおける移籍状況と 2011 年度リーグ・アン，ドゥへの出場時間について

リーグ･アンにおける移籍状況では, 残留選手はレンタルバックを含めると約 87% である。著者らが 2011～12 年にかけての J リーグでの調査での残留者は, J1 が 68% J2 が 58% であり, J リーグに比較して移籍が活発ではない。また, 4 大リーグからの移籍はわずか 1% に過ぎず, 豊富な資金力を持つパリサンジェルマンチームに集中している。残留選手の出場時間については, 2011 年 J リーグの調査では, 出場無が J1 で残留者 364 人中 61 人であったのに対し, リーグ・アンでは残留者 442 人中 64 人という結果であった。

リーグ・アンにおいては下部組織の充実もあり日本のように移籍が活発ではない。チーム組織の熟成度が高いために少ない人数でもリーグ戦を戦える状況であると考えられる。少ない人数のために出場機会も高い。リーグ・アンというプロリーグで戦える選手の資質が理解されているためにその基準に達していない選手は登録されず，登録された選手全てがリーグ戦に出場可能な能力を有しているといえよう。日本の場合は，チームの登録選手が多くチーム数も急激に増え，歴史も浅いために選手の能力基準が安定していない。技能の評価は相対的なもので難しい問題ではあるが，プロへの最終的な基準は，フィジカルの強さ，スピードの中での技術，戦術の発揮とチーム戦術などの理解能力である。ボールを蹴ったり止めたりの技術は少年でもできるが，成長に伴って強さ・スピードが増す中で技術を発揮できることや同レベルの強さ・スピードのなかで知的能力をいかに発揮できるかが必要である。この強

さ･早さなどは相対的で計量的に現わすことが難しいことからも，プロの登竜門であるJユース，高校，大学とJチームとの交流やJユース，高校，大学とジュニアとの交流など縦断的な交流を多くすることで選手自身の自己評価，点検，目標づくりを心掛けることが必要である。

5.　まとめ

世界トップリーグ登録選手状況，世界トップリーグでのフランス国籍，日本国籍選手の状況，トップリーグへの登竜門として存在するフランスプロサッカーリーグ・アン（Ligue 1）の選手状況を分析することから，日本のプロサッカーチームの問題点について検討した結果は以下のとおりである。

・世界のトップリーグでは25名以下の所属選手で構成しているチームが少なくない。
・日本では19～20歳の選手育成に問題点がある。
・リーグ・アンではフランス国籍，アフリカ国籍の若い選手が多く，トップリーグへの優秀な若い選手と即戦力選手の供給を行っている。
・リーグ・アンや4大リーグではプロ選手の持つべき能力を持っているものだけで構成されている。
・日本の選手が今後評価を高め競技力を高める点では若い選手がトップリーグに評価されることが重要であり，Jリーグ自体の質も高める必要がある。

プロサッカーの世界はプレミアリーグ，リーガ･エスパニョーラ，セリエA，ブンデスリーガを頂点として世界各国にリーグが展開され，プロ選手もプロを目指す選手もいつかは頂点のリーグでプレーしたいと希望を持っている。近年日本の選手が数多く移籍している事情は日本サッカー界が進歩していることを現わすものであるが，Jリーグが頂点のリーグになることは地理的歴史的環境的にも厳しい。2012年にJリーグが40チームまで増加したことは喜ばしい限りであるが，ビジネス的要素を多く抱えているプロチームは資金も含めた経済的な健全性は必要不可欠である。40チームが同列で優勝を目指すコンセプトでは今後成り立たないであろう。今回の研究によるリーグ・アンの示唆は，新たなコンセプトを生み出すことになると期待したい。プロチームが成り立っていくためには経済的基準だけで切り捨てられるようではスポーツ文化の醸成とはならない。一方プロチーム側も経済的基準だけでない新たなコンセプトを持つことも必要である。各チームの基盤に応じたチーム組織の提案，19～20歳代の育成方法などが今後の研究課題である。

参考文献

フロムワン編（2008）「愛するサッカーを仕事にする本」アスペクト.
グローバル・マーケティング研究会（2009）「日本企業のグローバル・マーケティング」白桃書房：16-40.
五島祐治郎（2009）「大学サッカーの断想」晃洋書房.
濱口博行（2010）「日本はサッカーの国になれたか．電通の格闘」電通.
広瀬一郎（2010）「極私的サッカー見聞録」東邦出版.
福　龍太（2008）「ブラジルのホモ・ルーデンス」月曜社.
J リーグ公式サイト（about J）　http://www.j-league.or.jp/aboutj/　2012 年 8 月.
J'sGOAL　http://www.jsgoal.jp　2012 年 8 月.
ジャン・ジュール・ジュスラン　守能信次訳（2006）「スポーツと遊戯の歴史」駿河台出版社：220-240.
松原　悟（2011）「選手構成からみた高校・大学サッカーの現状東北学院大学教養学部論集第 160 号：35-39.
松原　悟（2012）「J1 リーグチーム組織に関する考察」東北学院大学教養学部論集 161 号：55-66.
松原　悟・高橋信二（2012）「J リーグ移籍に関する考察」東北学院大学教養学部論集 162 号：17-30.
松原英輝他（2009 年）「フランスのサッカー選手育成の現状について」大阪教育大学紀要第 IV 部門第 57 巻第 2 号：241-258.
宮澤永光他（2009）「現代マーケティング」ナカニシヤ出版：208-227.
文部科学省ホームページ（スポーツ　スポーツの振興）http://www.mext.go.jp/a_menu/05_a.htm 2012 年 8 月.
R・トマ他　山下雅之訳「フランスのサッカー」白水社.
谷塚　哲（2008）「地域スポーツクラブのマネジメント」カンゼン.
The Official Website of the Barclays Premier League　http://www.premierleague.com　2012 年 8 月.
The Official Website of the Bundesliga　http://www.bundesliga.de　2012 年 8 月.
The Official Website of the League 1　http://www.lfp.fr/　2012 年 8 月.
The Official Website of the Legaseriea　http://www.legaseriea.it　2012 年 8 月.
The Official Website of the LIGA BBVA　http://www.lfp.es　2012 年 8 月.
The Official Website of the TFC　http://www.tfc.info　2012 年 8 月.